

セトケンニューズ

レターに期待する

金沢医科大学助教授

平口 哲夫

セト研に普及委員会を設け、会誌とは別に情報誌をぜひ発行してほしいと昨年の総会で提案、承認されたのですが、今回ようやく実行の運びとなり喜んでおります。

セトケンニュースレターというと、私はまず鯨研通信のことを連想します。一九八五年二月、宮崎信之博士に案内されて江東区大島の鯨研を訪ね、所長をしておられた大村秀雄先生に初めてお会いしました。以来、鯨研通信の愛読者となり、いづれ第一号からすべて読破してやろうと思いつつ、どうせすぐには読み通せないだろうと、まずは新しいほうから三〇号までのバックナンバーを二回に分けて送ってもらいました。セト研で日本海域鯨類文献抄録を作成することになったから、文献検索の必要も出てきたので、中央区豊海に移った鯨研に再度お願いし、第一号からのコピーないしバックナンバーを大方揃えました。大村先生は、この二月に逝去されたとのこと。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

鯨研通信は、一つ一つの号ではジャンルに偏りがありますが、全体として

は多様性とみ、お堅い論文もあれば肩のこらない随筆もあるといったところでは、第二七号と第二八号（一九五三）には、山田致知先生の「鯨の耳」が掲載されています。これは鯨研英文報告第八号の論文をわかりやすく解説したもので、専門外の読者にとって実にありがたい試みです。

セト研の場合、会誌と情報誌の二本立てで幅広いジャンルを開拓することにより、会員の視野を広げ、自然・文化の両面で活発な運動を展開していけると思います。親しみと速報性のある情報誌の発行は、各地の会員のつながりを強めることにもなるでしょう。

先日の総会で説明したように、日本海域鯨類文献抄録作成の試行作業もようやく煮詰まってきました。やがて皆様に正式な作成要項をお送りし、本格的な作業に入ることになるうかと存じます。今後、作業の進み具合をお知らせしたり、文献収集にまつわる話題を紹介するといったことにも、セトケンニューズレターが活用されるよう期待しています。会誌編集委員会や漂着記録調査委員会の活動についても同様なことがいえるのではないのでしょうか。

（日本海セトロロジー文献抄録委員長）